

論文審査の結果の要旨

平成 29 年 2 月 25 日

○課程博士 論文博士	臨床教育学	(ふ り が な) 学位請求者氏名	すがい かづき 須貝 香月
論 文 題 目	発達障害児とその親が安定した関係を構築するための親支援の研究		
審 査 員 (3名以上)			
主 査 氏 名 印	副 査 氏 名 印	副 査 氏 名 印	
石川 道子	河合 優年	倉石 哲也	
論 文 審 査 要 旨			
<p>本論文は、現代の子育て支援を総論的に整理し、わが子を育てにくいと感じている親に対する子育て支援には特有の配慮すべき側面があるのではないかととの視点で研究を進めている。育てにくさをもっている子どもの中には発達障害等の特性をもっている場合も多く、その場合は親子関係で不調が生じやすいこと、また診断や支援の遅れによって、長期にわたって不適切な対応を続けた結果、親子とも二次障害が生じやすく、子どもが成人後もサポートが必要になると報告されている。これらの特徴がある発達障害児に注目し、発達障害児を育てる親への支援プログラムの現状とその効果および親が必要としている支援についての検証を試みた研究である。</p> <p>第1章において「育てにくい子」「育児支援」「子育て支援」「親支援」等の語についての定義を行い、研究の対象を明確にしたうえで、第2章、第3章において、学位請求者の修士論文における知見である育児不安と乳児期における母親の子どもの理解についての認識プロセスについて記述し、現在本邦にて実施されている一般的な子育て支援と発達障害児への子育て支援の両者についての先行研究の概観をまとめている。子育て支援では問題を抱える家庭に対しての早期介入を目標としているが、支援者に発達障害に対する知識がない場合には、育てにくさを感じている親が必要としている支援になっていないことが示唆された。具体的には、的確な助言がもらえない、親の孤立感や無能感を深める結果になる、診断に至る機会を逸するなどである。発達障害児への子育て支援としては、応用行動分析を基本とした、親に対して養育のスキル獲得を目標としたペアレントトレーニングが主流であり、効果についての報告は多数存在していることを代表的な肥前式プログラムと精研式プログラムを中心にまとめている。</p> <p>続く第4章、第5章、第6章では、多数ある親支援プログラムの中から、発達障害児の親を対象にしているが、診断の有無を問わない、親の自発的な動機での参加が多い、参加者の年齢制限がない、継続参加が可能であるという特徴がある一つの親支援プログラムの参加者に対して、3つの調査を実施し、その結果を記述している。調査方法としては、調査1では、参加者101名の特徴を分析するとともに、参加前と参加後の二回にわたり、複数の質問紙（生後半年までの育てにくさ、育児不安、養育観等、ベック抑うつ質問紙、理想と現実）に回答した64名の結果を分析することで効果検証を試みている。調査2は、参加者11名が提出した学習シートである70枚の「やり取りシート」の記述を分析し、日常生活の中で生じる様々な問題場面での親の対応をカテゴリー化する質的研究である。調査3は協力の同意が得られた5名にインタビュー調査を実施し、調査1、2の結果との照合を行っている。</p> <p>結果としては、調査1では、①子どもの年齢が2歳から17歳までと幅広く、就学後に受講開始する抑うつ傾向の強い親が少なくない。②子どもの性別によって、受講開始時期や質問紙への回答結果に差がみられた。女子の親は、男子の親に比べて受講時期が各年齢に広がり、抑うつ傾向の割合が高く、相談相手が少なく、否定的育児感情と育児多忙感の平均値が高く、生後半年までの育てにくさが少なかった。③受講前後の比較では、従来報告されているように、育児不安は軽減し、抑うつ傾向は改善、育児感の「私の子どもは育てにくい子どもだと思う」のポイントが下がっているという結果が得られた。また、④受講を継続する群（継続群）31名と非継続群22名の比較では、受講前には両群の差がないが、受講後には非継続群のみに否定的育児感情や養育観において有意な変化がみられており、従来の報告と一致した結果となった。調査2では、日常生活場面を記述した</p>			

「やり取りシート」の分析の結果、放置という対処法が子どもとの対立状態を好転させているという結果を得た。調査3では、繰り返し受講している4名と継続していない1名のインタビュー内容の比較から、繰り返し受講する理由として①学習シートにやり取りを文章化することで、自分と子どもの状態が客観化できる。②個人だけで継続するのは困難③グループワークの有効性④異年齢のグループなので将来の予測や過去の肯定的振り返りができるなどが抽出された。

以上の結果を踏まえて、育てにくいと感じる子どもを持つ親支援として、①診断の有無や子どもの年齢などの制限がなく、親が支援を必要とするときに参加が可能な支援②子育て支援というよりも親の不安を受け止める継続した支援③親子関係が安定して生活を過ごすことで子どもの生活も安定するので、日常生活が安定して送れるための助言が得られる支援④他者からの支持や自己肯定感が得られる当事者同士のグループワーク⑤将来の見通しと過去の肯定的振り返りが可能な異年齢グループワークなどを必要としていることが推測された。

タイトルは親支援であるが、調査対象となったのは全員母親であり、受講するためには一定の条件が必要なことと実際の日常生活は母親中心である実態が明らかになった。特定のプログラムへの参加者を対象としていたことも加えて、本研究の限界と課題と認識した。

H28.10.10の論文審査委員会にて、一つのプログラムの参加者に対象を絞り、詳細に多角的視点から分析している点は評価できるが、論文の記述上の問題点として、①アンケート調査の結果の統計的处理や「やり取りシート」の質的分析における記述を正確に誤解の生じないようにすること②総合考察で問題提起の項目と若干の不一致点があるので記載を再度推敲することを提案され、申請者も指摘された点に修正を加えることに同意したことにより、修正は可能と考え、審査結果は合とした。修正すべき点の詳細については、新旧対照表に記載されている。

目的の明確化のため、目的を以下の5点に変更した。① 子育て支援の現状と実施されている子育て支援プログラムが育てにくい子どもをもつ親に対しても有効かどうかを検討する。② 現在日本で実施されている発達障害児の親支援プログラムを整理する。③ 育てにくい子どもを持つ親に対する支援プログラムの参加者を対象として取り上げ、効果検証するとともに、支援を求める親の特徴について整理する。④ ③で取り上げたプログラムで使用された学習シートから、母親の子どもへのどのような対応が親子関係を円滑にし、親子関係を安定したものにしていくかを解明する。⑤ ③④からどのような支援プログラムを親は求めているかを明らかにする。変更した目的に沿って、論文を推敲しなおし、特に第7章総合考察を手直した。また、調査2（第5章）の分析をカテゴリー分析に変更し、非介入による自己解決の促進のサブカテゴリーとした放置という対処について詳細に記述するとともに、3場面に分けて対処法の差異を明らかにした。

H29.1.25に実施された2回目の審査委員会では、前回の修正要求点についての改善はされているが、修士論文で構築された子どもの理解の認識プロセスと関連させた理論の構築までは到達していない、表記上のミスが存在する点などを指摘されたが、合議の上、臨床教育学の博士論文としては合とする結論が出された。

H29.1.28の公聴会では、「育てにくい子ども」と「放置」という用語について、正確に意図が伝わるために、説明を要するとの意見が出され、「育てにくい子どもと感じる親」「育てにくさを感じる親」と正確に記述し直すことを提言された。また、「放置」は「タイムアウト」に変更し、論文の末尾に追加説明を加えるという条件で、論文の合否判定となり、合の結論となった。